

第1回 奈良市眺望景観保全活用計画市民講座

日 時：平成23年10月1日(土) 14:00～16:00

場 所：奈良市中部公民館 第4講座室

参加者： 名

アドバイザー：奈良女子大学教授 増井正哉

事務局：奈良市景観課

1. 開会挨拶

仲谷課長：10月に入り涼しい季節となってきた。9月10日に全体の講座として、イベントを開催させていただいた。その内容をもう少し詳しく皆様に知っていただくことを目的として、今週から3回にわたり市民講座を開催させていただく。説明だけでなく、皆様とともに議論させていただきたいと考えている。

奈良市には素晴らしい景観がたくさんあり、そのなかでも特に眺望景観を守り、将来世代に引き継いでいかなければならないという思いから、奈良市では眺望景観保全活用計画の策定に向けた取り組みを進めている。おぼろげな記憶であるが、私が小さな頃は猿沢池から興福寺五重塔がもっと見えていたと思うが、現在は上から1、2層目くらいまでしか見えない。また、私の住んでいたところから、かつては若草山がはっきりと見えていたが、現在はマンションが建ち並び、全く見えなくなっている。良い景観を次の世代に残していかなければならないという思いから、眺望景観の保全、活用、そして整備も含めて実施していきたいと考えている。

今回は第1回であるので、眺望景観の保全活用の取り組みについて、担当の方から説明をさせていただきます。

本日はお忙しいなか参加いただき感謝する。

2. 議 事

徳岡係長：市民講座の進め方であるが、配布資料の中に「意見用紙」がある。設問ごとに説明させていただき、設問に関するディスカッションを増井先生も含めてお願いしたいと考えている。その上で各設問に回答いただきたい。

(1) 計画策定の背景と目的について

徳岡係長：(「計画策定の背景と目的」の説明 - 略)

増井教授：補足説明をさせていただく。古都法などにより早くから景観の保全に取り組んできており、奈良は景観保全には先進的な地域である。奈良に居住の方も他の地域の方も奈良の景観が大切であるという共通認識はかなり古くからあったといえる。しかし、町を歩いてみてもこれで良いのかと思うものも多くなっている。今までの制度では十分ではなかったものもあり、市民の意識を変えていかなければならないなかで、眺望景観の保全・活用に取り組んでいこうという経緯があったと聞いている。計画策定の背景の部分は、我々が日頃感じている課題を市として整理されたものであると思う。

市民 A：背景は概ね理解でき、眺望景観の保全活用の目的についても概ね賛成である。しかし、奈良市は世界遺産のまちであり、8つの世界遺産及びそのバッファゾーンの保存が重要であると考えている。最近、地震や火災、台風などにより、資産が大きな被害を受けている。台風12

号、15号では熊野や吉野の世界遺産を含む歴史文化遺産が被害を受けた。東日本大震災では国宝や重要文化財を含む700件にも及ぶ文化遺産が壊滅的な被害を受けた。世界遺産都市の奈良においては、8つの資産を守ること、そして、その周辺のバッファゾーンの保存と景観形成、資産と一体となったまちづくりが重要である。そのような視点が、背景や目的のなかでやや欠けているのではないかと感じた。

奈良市においては、巨大災害による自然の破壊と併せて、森林の伐採や住宅開発などによる人工的な自然の破壊などもある。農林課に聞くと、森林は年々減少しているという。世界遺産への眺めを良くすることと緑への眺めを良くすることは一体でなければならない。目的の中に自然環境、森林の保全の視点を入れるべきである。西部地域では矢田丘陵や生駒山への眺望が重要であると思う。矢田丘陵は自然景観としても重要であるし、大和郡山へかけての東明寺や松尾寺など重要な歴史遺産もある。最近、矢田丘陵を開発して大規模住宅地にしようという動きがある。また、ならやま大通りの街路樹の減少なども問題である。東部地域の記載が多く、西部地域のそのような視点が盛り込まれていないのは片手落ちである。

仲谷課長：確かに自然についての記載がない。世界遺産のバッファゾーンという意味でも重要であると認識しているので、取り入れられるところは取り入れていきたい。西部地域について、矢田丘陵は大切であると認識している。現在、奈良らしい眺望景観候補として39件をピックアップしている。この39件で決定ではなく、意見をいただきながら反映させていきたい。

増井教授：日本では、世界遺産のバッファゾーンの位置付けは文化財保護の枠組みの中では全くない。そのなかで奈良市では奈良町都市景観形成地域などにより、現実に対応できる施策で対応している状況にある。世界遺産を核としてその周辺の景観を大切にしていこうということは、世界遺産条約に加盟することによって気付かされたことである。今回の眺望景観の保存にあたって、そのあたりに目配せをしておくことは重要である。計画素案では、明確に示していない部分があるので、対応を検討いただきたいと思う。

自然保護と眺望景観の関係の指摘があったが、山林の荒廃のほかにも、農業や伝統工芸、伝統産業など、眺望景観は目に見えるもの全てが構成要素になる。眺望景観の保全のためには、奈良市一帯、また、奈良市に限らず周囲も含めた全体的な施策として取り組まなければならない。そのような視点から、共通の目標をもつためにも、眺望景観の保全活用に奈良市全域で取り組んでいくことは大切である。実際の運用や制度設計の段階で、関係する部局と連携した施策を徐々にでも取り入れて進めてもらえば良いと思う。

市民B：3つの目的があげられており、そのうちとは分かり易い。の「市民生活の質の維持・向上に資する」が分かり難い。風致地区に長年住んでいるが、良いと思う景観や雰囲気がないためピンとこない。具体的にどのように豊かになるかのイメージを教えてください。もう一点、奈良の景観は誰のものかを考えた場合、答え難いものである。奈良に住んでいる人だけのものではないし、訪れる観光客だけのものでもない。定義し難いものである。そのあたりをどのように考えて計画づくりを進めているのか教えてください。

仲谷課長：一点目について、奈良のなかで祭や生業などがその一つであると考えている。特に、少子高齢化や核家族化が進むなかで、父から子、子から孫へと伝えられるということが少なくなってきた。そうすると、親や祖父母が愛してきた景観や山並みなどが伝わっていかない。そのような繋がりが途切れないようにしていくことは重要であると考えている。また、先ほども挨拶で猿沢池からの興福寺五重塔への眺望が変化してきたという話をさせていただいたが、樹木なので成長し、隠れてしまっているということもあるが、やはり見えている方が

気持ちも豊かなものになると思う。また、祭りは地蔵や神社と自然などのもとに、長い歴史の営みのなかで育まれてきたものであり、例えば山が見えない、川が汚いということでは、祭りをしようという気持ちも起こらない。そのような意味でも、美しいものを美しいままで保全していくことで、豊かな心が育まれると考えている。

二点目について、目的の には観光資源という形で位置付け、 には住んでいる方々のためにも保全すると位置付けとしている。従って、皆のためという位置付けになっている。

(2)「眺望景観のとらえ方」について

徳岡係長：(「眺望景観のとらえ方」の説明 - 略)

増井教授：何のためにタイプ分けをしたのか。タイプをどのように使っていこうとしているかを説明いただいた方が分かり易いと思う。

仲谷課長：大きくみると、タイプ ~ と ~ で性格が異なる。一般的に眺望というとタイプ ~ の類型になると思う。 から は少し特殊であり、意味づけをしたものである。タイプ分けすることで、各タイプに共通する保全や活用の方策を抽出できるのではないかと考えた。例えば、見通し型であれば、道路からの見通しの先に大仏殿が見える眺望や、きれいな川の向こうに伝統的な建造物などが見える眺望であり、その場合、沿川・沿道に映ってくる宅地や山、樹林などの規制や視対象の背景の保全などが共通の課題としてあると考えている。

増井教授：タイプごとに課題を洗い出し、どのような施策が必要かをまとめていくために整理したということだと思う。

仲谷課長：眺望景観のとらえ方を示した意図としては、景観には様々なものがあり、町並みなども景観である。そのため、ここでは距離について「原則として視対象が中景から遠景に位置するもの」と定め、中景から遠景を主対象としたいと考えたところである。なお、近景から中景については、奈良市景観計画のなかで誘導の基準や方策を示している。

(3)「奈良らしい眺望景観のとらえ方」について

徳岡係長：(「奈良らしい眺望景観のとらえ方」「奈良らしい眺望景観の保全活用の目標と方針」の説明 - 略)

増井教授：先ほどの「眺望景観のとらえ方」で6つのタイプに分けていたが、基本方針の説明から、なぜタイプ分けをしたのかが分かってきたかと思う。シークエンスとは何か補足説明をお願いしたい。

徳岡係長：シークエンスとは、移動することで変化する景色、徐々に変わっていくデザインである。例えば、車に乗っていると景色が変わっていくというのがシークエンスである。

増井教授：具体的に東大寺二月堂裏参道から東大寺二月堂への眺望景観の写真で説明して欲しい。

徳岡係長：階段を登っていくことによって、左右の景色が変わり、視対象の東大寺二月堂が大きく見えてくるということである。

増井教授：階段を登っていくと少し曲がり、二月堂が形を変えて見え、土壁の色が変わって見えてくるようなことを業界用語ではシークエンスという。

他の都市との比較について、後ほど説明があるかと思うが、奈良の場合は奈良らしい景観の特性として、「目に見える景観」のほかに「心で感じる景観」「情報としての景観」があることが、他の都市との大きな違いであると思う。奈良の場合は、何といても様々な歴史性や生活文化があり、多くの人が奈良の景観のすばらしさについて、写真や絵画、文学など、様々な方法で表現している。そして、そのことにより、市民だけでなく全国レベルで奈良の景観についての知識をもっており、景観のバックグラウンドにある歴史を知っている。そのよう

なところに奈良のすごさがあるのだと思う。また、情報という点では、ここからみた東大寺大仏殿が良いということなど、多くの情報が発信されており、観光客はそれを確認しに来ている。そのような視点から3つの景観の特性があげられている。

地域別に奈良らしい景観のとらえ方について、先ほど西部地域の話があったが、私も奈良盆地から東側の山並みに限定しすぎているという感じは受ける。東部山間地にも良い集落があるし、西部丘陵地にも矢田丘陵や生駒山があり、新しい市街地にも良いところやもう少し改善すれば良いような市街地もある。そのようなところも、眺望景観として捉えて、どのように改善していったら良いかなどを示していければ良いと思う。後で出てくる奈良らしい眺望景観候補39件では東部山間地や西部丘陵地をもう少し入れていき、文章表現なども修正した方が良いかと思う。

市民 B : 景観のとらえ方を3つの視点から整理されているが、可能であれば「体で感じる景観」も追加いただきたい。景観は目から得られるものだけではなく、花の香、湿気や湯き、小川のせせらぎなどが大切であると思う。奈良には五感で感じる場所が多い。春日の森は湿気がないとさっぱり魅力がない。広義では、心で感じるに含まれるかもしれないが、今の説明では、知識・頭で感じる景観という印象が強かったので、そのあたりを強化されてはどうかと思う。もう一点は、景観のなかに人がいるというのは景観といえないのか。例えば、二月堂裏参堂では、たまに紫色の袈裟をまとった僧侶の方がいる。これは奈良市にしかない景観であり、人がいないと少し物足りない。袈裟をまとった僧侶が現れた瞬間に世界一の景観になる。人が入る景観というのは景観といえないのか。

仲谷課長 : 一点目について、音や匂いなど五感を通じて奈良を見ていくということは大切であると認識している。検討させていただく。

二点目について、入江氏の写真を見てもほとんど人が入っている。人が入っているから、景観のスケール感も分かる。なかなか人の入った良い写真が撮影できないということもある。今回提示している写真は、これで確定というものではなく、良い写真があれば差し替えていきたいと考えている。

増井教授 : 私たちが町を歩いている時にみる景観のすばらしさは、建物や農地や樹林だけで構成される目に見えるものだけで感動するのではない。例えば、春日の森の湿気とせせらぎの音と小鳥のさえずり、木漏れ日などがあって、五感で景観を楽しんでいる。また、若草山もしんどい思いをして登って眺める景色とその記憶がよりその価値を高めている。市民的な認識は自分の体験などを絡めた形での眺望景観であると思う。従って、市としてコントロールできるものや他の部局と連携してできることという枠組みの中で考えていると市民的な認識と離れてしまう。五感で感じるということが市民的な認識としてあるのであれば、そのあたりを考えながら進めていかなければならない。入江氏の写真を見て、人が入ることでスケール感が分かるということは、それは良いと思うが、もう一つ、畑仕事をしていることやお坊さんという東大寺のシンボリックな人がいること、鹿に餌をあげている外国人がいることなどが大切であり、そのことで親しみのある景観になると思う。市としてはあくまで施策として実施しなければならないことなので、考慮しながら進めていただくとともに、双方の接点を探すとすれば、写真なのかもしれない。もう少し私たちが体験して良いと思う写真に変えていければ良いと思う。

市民 A : 他地域から来る観光客からよく聞くのは、近鉄奈良線で大阪の殺伐とした町並みから緑の多い奈良へ来るとほっとするという。私はそれが本当の奈良らしさだと思う。奈良らしさとい

う言葉が出ているが、奈良らしさとは何か。世界遺産がある、豊かな緑がある、眺望が良いなど、様々であると思う。都市環境、生活環境、自然、歴史、地球温暖化など様々な視点から環境や景観を考える必要があると思う。生活環境や自然環境を守ることに加え、自然災害や人災である原子力による放射能汚染なども含めて考えていく必要がある。奈良県は原子力と無縁とはいえ、奈良県の電力の約半分が原子力によるものである。原子力の事故は最大の環境汚染である。これからは環境問題や景観問題を考える場合は、そのような巨大災害や原子力災害を頭に入れながら考えなければならない。

歴史文化遺産があるのは京都も同じであるが、京都との違いは何か。奈良は来てほっとする。京都は近代化と古い町並みが整然と混在しながら保たれている。景観の場合、京都との違いを明確に打ち出さなければならないのではないかと思う。

景観の特性として、目に見える景観、心で感じる景観、情報としての景観を示されたが、障害者に対する景観という視点を打ち出さなければならないと思う。そのような視点で、五感で感じる景観という考え方があっても良いと思う。

奈良らしい眺望景観候補の 39 件のなかに「あやめ新橋から若草山への眺望」がある。かつて、都市整備部に対して、あやめ池地域の新しいまちづくりを進める上で眺望が大切であるため、菖蒲上池から若草山を阻害する建物はやめて欲しいということを示し出した。そのことにより、近畿大学附属小学校幼稚園は眺望に配慮して設計され、現在も若草山への眺望景観が保たれている。景観に配慮したまちづくりというのはそのようなことであると思う。新しくできた保健所と教育センターについても、審議会で問題になり設計変更が行われた。役所はタテ割りであり、課が違えば連携できないという欠点があり、それがまちづくりの障害となっている。もう少し新しい視点で景観を考える必要があると思う。

自然災害や原子力災害対策が前面に立つ必要はないが、安全安心のまちづくりのベースがあって初めて景観が保たれるという認識が必要である。

仲谷課長：都市環境の視点や京都との違いの視点、五感を通じた景観の視点など貴重な意見をいただいた。ご指摘のような新しい視点が必要であると認識している。今回の眺望景観保全活用計画の策定にあたっては、まさに今ご指摘いただいたような視点が必要であると考えている。菖蒲池に限らず奈良市内各所にそのような場所はあると思う。そのような場所をみつけて、今のうちに警鐘を鳴らしたいということが計画づくりのきっかけのひとつでもある。皆さんにそのようなことに気付いていただきたいという思いもあり、市民講座も開催させていただいている。今後も市民講座やHPなどでの情報発信をしていき、市民や事業者、行政が協働で景観問題を解決していきたいと考えている。今回提示させていただいているものは素案であるので、ご意見を反映させてより良い計画としていきたい。

(4)「他都市の事例」「移動する視点の事例」について

徳岡係長：(京都市・金沢市・神戸市の眺望景観の保全の取り組みの説明 移動する視点の事例(大池から薬師寺東塔への眺望) - 略)

増井教授：最終的な形が少しでもイメージできた方が良いかと思い、他都市の事例を紹介いただいた。奈良市の計画が最終的に紹介いただいたような形になるかは分からない。

全国で眺望景観の保全や活用の計画はどのくらいあるのか。

徳岡係長：小田原や松本、鹿児島などでもみられる。

増井教授：全国で少しずつ策定を進める自治体が出てきており、奈良が遅れているというわけではなく、どちらかというと先発組に入るのかと思う。奈良らしさというそもそもの問題もあるが、そ

のあたりを踏まえながら独自色を出していかなければならないと思う。

大池からの薬師寺三重塔への眺望景観の説明はどのような意図から紹介されたのか。

徳岡係長：視点の場所が変わることで、見え方も変わるし趣も変わる。背景に見える景色が隠れたり、障害するものが見えたりする。背景の大切さが感じられると思う。一点から見て良い景色というのではなく、様々な場所から見ても奈良市街が粗雑に映らないことが大切である。今回示したものは写真であるので、かなり拡大しているが、実際はもっと広がりのある景色であり、遠くに小さく見えることになる。写真家が撮られた写真がもとになっている風景でもあり、多くの人が同じアングルで撮影しようとする風景である。その場合に障害するものが映り込まないようにしたいという思いがある。

増井教授：この写真を見ると、ある場所のビルがすごく気になって見える。建物の高さに対するコントロールの課題などが、このような写真を通して見ることで明確になってくる。そのような課題に対して、景観の施策で対処できる方法を探そうという取り組みでもある。もう一つは周辺の田園や山、ため池など全てが関係して出来上がっている眺望であるということである。景観施策でコントロールできるものではないものである。逆に、景観の方から見ると、この山並みはこんなに大切である、この農地はこんなに大切であるということを担当部局に強調していかなければならないと思う。眺望景観を守るというひとつの目標に様々な人が連なってこなければ、なかなかうまくいかないということを感じた。

(5) 第2回市民講座に向けて

徳岡係長：第2回市民講座に向けてのさわりだけ紹介させていただく。第2回は、奈良らしい眺望景観候補39件をどのような形で選んできたか、また、その39件についての説明を行い、議論いただく予定としている。

(候補39件の写真のみ簡単に説明 - 略)

市民A：世界遺産でもある春日山原始林にドライブウェイがある。高円山ホテルが昨年暮れに廃業した。また、三笠温泉郷をつくる時も様々な問題があり、反対運動もあった。現在は、ナラ枯れなどの問題を解決しなければならないという問題もあるなかで、ドライブウェイの排気ガスを出し続けて良いのかと感じている。また暴走族が走り回っている状況もあり、ゴミの不法投棄などもみられる。私見ではあるが、ドライブウェイは一定の目的を達したものであり、ドライブウェイの使命は終わったのではないかと考えている。奈良市景観課からPRしていく眺望のなかにドライブウェイからの眺望を入れるべきではないと思う。世界遺産の春日山原始林を守っていくという視点からは、ドライブウェイを再評価する必要はないのではないかと。歩いて中に入り、原始林を見て回り、植生や生態系を楽しむことこそが景観を感じることであると思う。

仲谷課長：39件の元となる写真は市民公募により収集したのももあり、定期的に写真を撮り続けている人もいる。ドライブウェイを使うことは時代遅れなのかもしれないが、ここに昔からの視点場があることを考えると、外すことも難しいと考えている。今後検討していきたい。

3. 閉会挨拶

仲谷課長：本日はお忙しい中、市民講座に参加いただき感謝する。第2回は来週土曜日、第3回は再来週土曜日に同じ時間帯で実施を予定している。可能であれば連続でお越しいただき、貴重な意見をお願いしたい。このような話は行政だけで進めていけないものではないので、皆様からの意見をいただき、計画に反映させていきたい。今後とも宜しくお願ひしたい。